

# 長生き

磯崎 觀

大平さんからおくられた『私の履歴書』をしみじみ読み返した。扉の写真といい、珠玉のような文章といい、短かつたがしかし多彩だった彼の生涯の記録として、実に淡々とした、しかも謙虚な雰囲気をもし出して、今更ながらその人柄がしのばれて、懐しさがこみ上げてくるのを禁じ得ない。

その中で私どもの仲間の交わりについて、若干の頁をさいておられるので、故人にはまことに申しわけないが、その「愚者の交わり」について一言ふれさせていただくことにする。

そろそろ四十年の昔になるだろうか、私も九人は当時の内閣の興亜院という役所でほぼ時を同じうして机を並べていた。余りちみつな頭腦の持合わせもなければ精密な計画力もなく、毎日アジアの地図を眺めながらぼうよつたる議論をして、日本の遠い将来を論じ合っていた。

というよりも、酒好きの連中ばかりだったので「飲食歓娛」のうちに友情をあたため合っていたというほうが適当かも知れない。大平さんもその例外ではなかったといつては失礼にあたるが、「おまえ」「おれ」と呼び合う中にも何となく悪童連の兄貴分、頭領のような顔をしていた。

仲間の一人の伊東正義君の言葉を借りていえば「彼の性格は西洋的な合理主義であると同時に東洋的な倫理性が適当に調和していて、非合理なことが大きらいな半面、東洋流の義理と人情を持ち合わせている」と評することく、固い仁義と親しい情義の中に四十年の交わりをつづけてきたこの仲間にとっては、やはりかけがえのない

頭領だと思われていた。

ある晩例によって皆で「山楽」で飲んでいた。ちょうどその折に、同家におられた池田勇人先生がそのことを聞かれてガラツと唐紙を開けて入ってこられ、「おいこれを飲めや」と一升瓶を置かれた。ところが悪童連中は酒が半ばで虫の居所が悪かったせいも、一人が「何だ人の部屋に勝手に入ってきて酒を飲めとは失敬じゃないか」とおこり出した。一同何となく付和雷同して「そうだ、そうだ」ということになり、揚句の果てに「どうぞお引き取り下さい」という羽目になった。

池田さんは「それじゃ仕方ない」といわれて不快さをかくさずに退席されてしまった。さあそれからが喧々こつこつ、どうしようかということになったが、ややあつて大平さんいわく「やはり俺達が悪いよ、お互いに知らない仲じゃないし、しかも酒一本持参という最高の仁義をきってきたんだから、これは大人しく謝つて酒はもらつておこつや」と。結局翌々日、皆で信濃町へお詫びに行つて一件落着した次第。

それからは時々きていただいて痛飲したり、またいろいろと仕事の方でお世話になることになったが、彼の名解決案がなければ、そううまくは取り運ばなかつたであろう。

私どもは大平さんのこの種の持ち味にはたびたび接してきたが、いつも後になって笑い話の中にほのぼのとした暖か味を感じるが多かつた。たしか彼が官房長官の頃、日本経済新聞の交遊抄に、私は「万物に対して人情厚く、近時孫を持つ資格を得てますます円熟。彼が宰相となる日まで皆で長生きすることとする」と書いた。

それから十数星霜、待ちに待った日は到来したが、名宰相の名を残して、彼、最早亡し。私どもの長生きの意欲が薄れきたるのを如何せん。